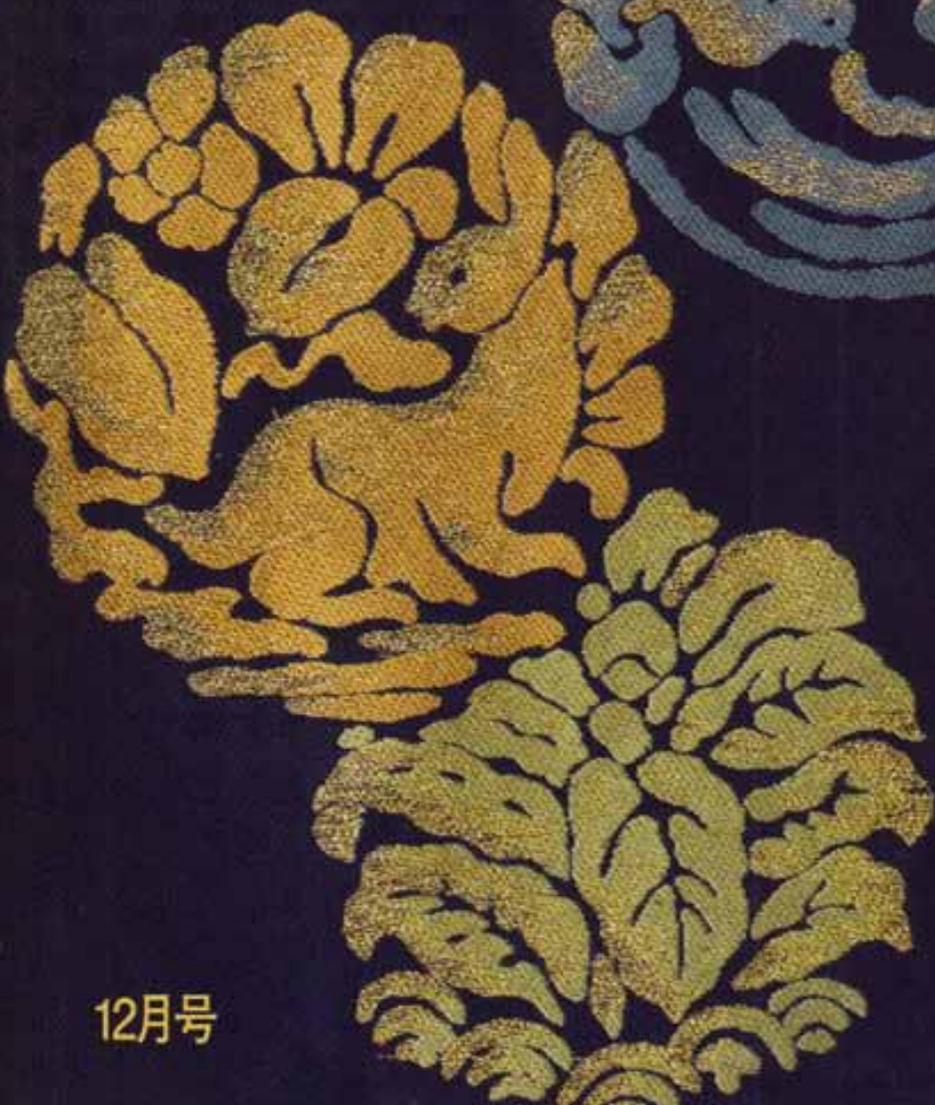


京鹿子

令和三年十二月一日発行
通巻一六八号(創刊四一四号)



12月号

鈴鹿 呂仁
拾掬集 その七十五

落人の里へとつづく草もみぢ
終着の柵野の別れ草紅葉
文束を手枕に寄す後の月
あえかなる風のほろ酔ひ十三夜
里老いて広がる空や吊し柿
ダ・ヴィンチの双眸の光ゲ冬薔薇
踏切は開かず落葉の夢は閉じず



寒禽の場末の風に首つ丈
調律のご無理御尤も残る虫
初しぐれ気休めに寄る二八蕎麦
系露忌

名を問うて秋草摘まず忌を修す
鳥辺野へ先の夢追ふ秋の蝶

大阪俳人クラブ吟行・四天王寺

睥睨の茶臼の護り鴟の陣
大坂へ先づは七坂鳶の秋

近詠

和田 照海

太閤堤

逆潮の風荒き日や鷹渡る
鳴子縄引く慣はしの通学路
母今も在ましますごとく砧石
而してじゆげむ寿限無と蛇穴に
首塚へ太閤堤のきつね花



近詠

松本 鷹根

初時雨

初時雨齒科医帰りの下り坂
愛宕から続く六甲冬安居
峡風に慣らす吐息や帰り花
栗熟れる校庭隅の風に笑み
入日果て帰路に戸惑ふ枯葉嵩





木洩れ日

秋 高 し 雲 悠 優 と 勾 玉 池
真 実 は 何 いろ 真 つ 赤 な 烏 瓜
鶴 鴿 の 舞 ふ や 木 洩 れ 日 降 り 止 ま ず
狛 獅 子 に 懐 く 黒 猫 神 の 留 守
秋 深 む 雨 情 い つ し か 慕 情 な る

英華採集

夏空へ義足一瞬鳥になる

福岡 上原 玲子

二〇二一年度の今年の夏と言えば、日本人の多くが興奮し感動しそして喜びの涙を流した東京オリンピック、パラリンピックであろう。日本が獲得したメダルの数も自国開催とは言え記録的な多さであった。中でも身体にハンデを持ちながらも不屈の精神を鍛錬で鍛えた技術には敬意を表する思いである。掲句は、夏の五輪だ、オリンピックと言わず俳句の基本である十七音での確に表現した言葉が秀句へと成さしめた。

藤袴指切りといふ口封じ

大津 鈴木 順子

「指切り」という習俗の歴史は意外と古く戦国時代に遡るらしい。最近では、親と子の微笑ましい指切りから恋人同士の甘い指切りまで使い方は多種多様である。しかし、男性の側から言わせてもらえれば、指切りは女性から持ち出され男性が約束を契ることが多いだろう。掲句の指切りも女性側からの「他言無用」の強要と取れる。女性は強しと言う印象が残るが、作者は藤袴という季語を置いた。これは、源氏物語の妖しげな世界への誘いかも知れない。

開け口の錆し栓抜き冷奴

福山 武藤 弘海

最近のビールの飲み方は、生ビールあるいは缶ビールが主流になっていて、瓶ビールへの拘り派は極く希であろう。故に、偶に瓶ビールを飲む時には栓抜きのある場所を探すのに四苦八苦した記憶がある。漸く見つけた栓抜きは、余り使わない物であるので、開け口が錆びついていたのを思い出す。多くの人が気付いている筈であるが句として目に止めたのは初めてであろうか？季語の「冷奴」と絶妙に響き合い遠き昭和の時代を揺り動かしていただいた。

ポインセチア 沼田巴字

ポインセチア何を得んとて朱をこぼす
ポインセチア笑つて生きる人がゐる
点字といふ文字美しや落葉道
裸木の鋭利な切つ先乱れ雲
冬禽の集まる日なり父忌日

そぞろ寒 北川孝子

惜別の師恩に遠く夕冷えて
虚と実の間合ひいくたび深む秋
追憶の視野をひろげしそぞろ寒
支度なき死などあらむと冬比叡
かみ合はぬ一日の会話そぞろ寒

虫の秋 植村蘇星

生かされて天与の恵秋高し
相聞がごと身互ひに虫の秋
と見かう見共吟百景天高し
過去有つてこそその人生秋深む
と見かう見先づは近景草もみぢ

草 笛 直江裕手

深海に眠る海の日など知らず
草笛の一瞬呆けし男刺す
指先に軽くなりたる髪洗ふ
もう許す自分を許す夕端居
色鳥の空広すぎる青すぎる

心音 高木晶子

夕立後の傘を離して仁王立ち
滴してお酒になりたくない葡萄
冬瓜を打てば心音鳴りひびく
聞かれても困らぬ程に虫の鳴く
玄関があき秋風のおくりもの

離島 奥田筆子

家族といふ離島なりいわし雲
ふくらはぎ脛りてピーマン袋詰め
ねこじやらしふつと句会の匂ひして
鰯雲追伸のやう生きてゐる
誰もみな遠く風船葛引く

非のなき闇 伊藤希眸

一と吹き風の風に秋立つ薄暮かな
夫逝けり庭の草々露を貯め
読まず詠はず秋の彼岸を素通りす
金欄の田に山背吹く夕静か
釣瓶落しの非のなき闇の中にゐる

冬 麗 井上菜摘子

雲見てゐた方がおとうと爛熟し
さよならのそれからのかほ雪催
冬麗のペットボトルの蓋開かぬ
兄の死のボディীবローの効いて雪
靴音の去り冬の月残さるる

神麓集

師走締む 村田あを衣

ふる里の彩より合はす糸玉
煩惱にうかと浮きたる冬の鯉
極月のひと日ひと日へホツチキス
高階へ灯を積み重ね去年今年
師走締む松百年の現在地

殞の火 山中志津子

二上のふもと青夜の残の火
藤袴徒然草に足す一草
蓮池の風の紡ぎしものがたり
鶏頭を隔て銅剣文化圏
家系図につながつてゐる南瓜蔓

はぐれ雲 井尻妙子

藤ばかま比叡に遊ぶはぐれ雲
青夜更くジャズ好きの寄る昭和カフェ
青夜ひとり母見えぬまで見送りに
いわし雲未だ母待つ日暮かな
決めかねし一事に更けてゆく星夜

ビオロンの 鷺山珀眉

はつ秋の嵯峨野をわたる風の音
秋のこ糸低き土塀のうす湿り
釈迦堂のまはり離れず秋の蝶
刈萱の揺れて小指の擦過傷
ビオロンのため息ひとつ秋薔薇

秋徴雨 亀井福恵

歳月のしづくの微塵走馬灯
秋徴雨高層ビル群総洗ひ
サンガラス己が世界にゐる痛み
姉といふ伝信の仲赤まんま
この炎暑たとへてフライパンの上

桔梗 菊池和子

渡月橋の下に空あり水澄めり
桔梗咲き心つなぎの雲流す
動かざる山河動かしゆく初秋
秋明菊けさ咲き更に夢つむぐ
ふる里の景立ち上がる蝉しぐれ

句読点 西村白杼

つくつくつくつくと山里昏れなづむ
秋雨の止むや草引く句読点
もう今はやぶれ雑布通草の実
幾たびも修羅場を踏んで曼珠沙華
平安の公家の名残りや藤袴

不思議 安田優歌

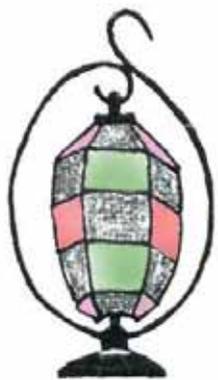
遠花火天にちちはは地に流離
新涼や八十の乙女の翅の音
老ゆるてふ不思議をつかむ日向ぼこ
夢殿の蕙の反りや柿熟るる
柿挟み蒼天一つひねりけり

早稲実る 本郷 公子

千の灯へ寄り添ふ影や秋のこ糸
ソケットに合はぬ電球八月果つ
一天の翳りなく地に早稲実る
手花火のあの手この手の懐かしき
遊子かな湖畔の松の夕かなかな

秋のこ糸 石原 孝人

追憶を手繰る潮騒秋夕焼
ひとひらの月光拾ふ首餌り
谿流や手で聴く水の秋のこ糸
蝗飛び風は光となりにけり
胡弓の音瀬音に沁みる青夜かな



京鹿子集

豊田都峰選

夏空へ義足一瞬鳥になる

福岡 上原 玲子

はじまりは雨後の一りん白木槿

球追へば轍百千トライの夏

絵団扇の風動き出す水流る

藤袴指切りといふ口封じ

大津 鈴木 順子

現し身の今がいとほし青夜更く

鬼灯やかくした嘘が赤くなる

終章を決めかねてをりつくつくし

開け口の錆びし栓抜き冷奴

福山 武藤 弘海

夕暮れの幽霊襟をゆるやかに

謎解きのポアロの髭や夜長の灯

割箸の綺麗にわかれて瓜の馬

絵本開け孫のお唱え初の盆

京都タワー灯りを消すも熱帯夜

川の字と敷布の匂い遠花火

揚花火太鼓腹へと届くかな

ひややかや一雨の来し窓の風

白木槿咲いてゐる家今日も留守

天の川元は素粒子我も又

蛸をきく川沿の草の道

アリゾナ 伊吹 之博

酒田 藤波 松山